

ウマの卵巢腫瘍について

浦河診療所 大塚 智 啓

ウマの卵巢腫瘍はそれほど馴染みのある病気ではないかもしれませんが、繁殖牝馬では発情周期が異常になり、不妊の原因となることがあります。今回はいくつかの卵巢腫瘍を紹介します。

・顆粒膜細胞腫

ウマの卵巢腫瘍で最もよくみられる腫瘍で、転移はせず良性ですが、卵巢がこの病気になると腫大し、もう一方の卵巢はホルモンの影響により萎縮し不活性になります。症状は、無発情、発情持続、種牡馬様行動等の発情異常が見られ、卵巢は静止状態となるため交配はできず不妊となり、繁殖牝馬としては重要な腫瘍であります。診断は直腸検査、超音波検査、ホルモン検査により行います。超音波検査では、蜂の巣状構造や多嚢胞性構造といった画像が見られることがあります。ホルモン検査は、近年感度が高いとされているAMHというホルモンの検査が行われています。治療は、外科的卵巢摘出が行われます。摘出後平均6～8ヶ月で発情が元に戻るとされていますが、1年経っても戻らない場合もあります。病気になった卵巢の逆側の卵巢が不活性になる卵巢の腫瘍は顆粒膜細胞腫のみです。

・奇形腫

発症は稀ですが、2番目に多い卵巢腫瘍とされています。色々な細胞が混ざり合っている良性腫瘍で、脂肪、歯、毛、神経組織等様々な組織が含まれることがあります。

・嚢胞腺腫

発症は稀な良性腫瘍です。超音波検査では持続卵胞の様にみえます。病気になった卵巢

の逆側の卵巢が不活性になることはありません。

・腺 癌

発症は極めて稀な悪性腫瘍です。中身の破裂や漏出により腹腔に転移します。

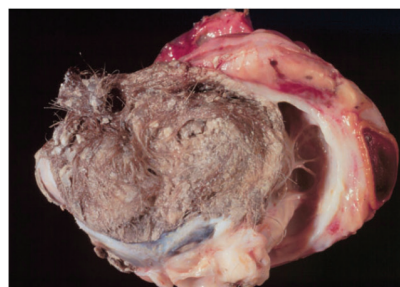
・未分化細胞腫

発症は極めて稀な悪性腫瘍です。急速に胸部や腹部に転移し、体重が落ちます。

他にも報告されている卵巢腫瘍はありますが、枠の関係でこの辺までとさせていただきます。卵巢腫瘍は繁殖シーズン最初の直腸検査で発見されることが多く、また発症することも稀ですが、このようなこともあるので頭の隅にでも入れておいていただければ幸いです。



顆粒膜細胞腫（左：摘出卵巢、右：蜂の巣状構造）



奇形腫（毛、脂肪、軟骨等を含む）